

第二十七章 変身戦車

中華民国がウイルス族への対応をどう言い訳しようと弾圧していることは周知の事実。しかし、ウイルス族の心まで管理できないのも事実。

どのようなルートかは不明だが、ウイルス族が考えた突拍子もない武器や兵器の設計図は鯛湾に流れていた。そして秘密裏に製造されて、これまたどのようにして運び出されたのか不思議だがウクライナー共和国に届く。

これが榊が考えた筋書きだ。加藤の見解もほぼ同じ。そこでイリはダレデモスキー大統領に頼み込んで特急ウク・ライナーでイリ王国に向かう。女王という身分を隠してイリは様々な人種が乗り込む列車内で情報を得る。

その中でイリが興味を持ったのが夜明け前に中華民国の首都ペッキンを出発する特急ドラゴン・ライナーだった。この特急は西に向かってまっしぐらに進む。最終到着駅はエゲレス王国の首都ドンドンだ。地球の自転に逆らって走るからウクライナー共和国の首都キープまでほぼ暗闇を走行する。ドンドン駅には夜明けに到着する。

イリが乗った特急ウク・ライナーは夕闇迫るキープを旅立つ。夜が背中を押すように迫るが東に向かって走るのではばらくすれば夜が明ける。薄暗い中にイリは何かを発見する。

「あれは？」

暗視双眼鏡のピントの精度を上げる。引き込み線にいる無蓋車にピンク色を基調にしたマダラ模様のいかつい塊を見つける。その形は正二十面体に見えるが無蓋車から草原に転げ落ちると色を変える。朝日のせいかわかピンクからオレンジへそして真っ赤になる。色に気をとられていううちに形状が変わる。大きな頭部と無限軌道を持つ車体になった。頭部にはゾウの鼻のような大砲が、そして大きな耳がうちわのようにパタパタと上下に動く。

「レッド・エレファント！」

いつの間にか特急ウク・ライナーはレッド・エレファントの真横に位置する。この不思議な戦車からシューシューと蒸気が吹き出し始める。やがて色が赤から紫に変わりやがて青色になって深みを増す。大きな耳はしぼみ角が出てくる。

「コバルト・カウ！」

イリは息をのんで見つめる。霧のような蒸気は戦車を囲んだまま漂っている。コバルト色はますます深みを増してほぼ真っ黒になる。そして裂け目が形成されて黄色の線が浮き出す。縞模様になると砲塔部からニョキニョキと三本の砲が現れる。

「イエロー・タイガー」

それまでと違ってイリの声は小さくなる。次はハリー・マウスに変身することが確実だったから。

「そういえばこの四種類の戦車が同時に現れたことはなかったわ。元々一両だけだったのかも？」

長老が大きく頷くとイリが着席する。すると特急ウク・ライナーがゆっくりと動き出す。そして短い汽笛を鳴らすと加速する。いつの間にか上空には無数のミサイルが見える。先ほどまでいたところからずれた場所に次々と着弾する。

精密攻撃ができないソシア軍は数にモノを言わず攻撃しかできない。オープンされているイリの移動情報をソシア軍が掴むことはたやすいが仕留めることができない。あえて情報をオープンにすると言うことは十分攻撃に耐えられる、あるいは逃げられると言うことだ。イリは絶えずあの不思議な戦車に守られていた。

さらに鉄道のシールドに欠かせない電力供給は電線を縦横無尽にまるで光のように走行するスネーク・ライナーに守られている。

*

「特急ウク・ライナーは完璧に守られている。攻撃をはねつけるし、損傷しても修復する。特急だと言っても特急料金は要らない。戦争でふるさとを追われた市民を乗せてひた走る。医療品や食糧、それにボランティアを運ぶ。私を守るためならここまで大げさな装置は要らないわ。宇宙戦艦一隻で十分。だからノロではない」

イリは車窓の外を見つめるが視点はそこにはない。

「ノロは逃げたんだわ。こんな地球を見限って自分の夢を求めてグレーデッドの一部か大半かは知らないけれど、引き連れて地球から逃げた。でも地球に残ったグレーデッドの残党はそれをよしとはしなかった。そう、地球に留まって何とかしなければと。だから、ノロとはまったく違う発想で地球の危機を乗り越えようとしてるんだわ」

イリが一つの結論を見いだしたときサボリーナ原発がソシア軍の猛攻を受ける。プチレンコン大統領も自分の身を守るのに手段を選ばなくなった。夜空にまぶしい線状の光が現れる。イリにはハッキリと見えた。

「スネーク・ライナー！」

イリは悟る。今スネーク・ライナーは特急ウク・ライナーの上空からサボリーナ原発に向かっていてと。

長老はコックリと頷いてイリの座席横のレバーをゆっくりと押ししてリクライニングさせる。自動的に毛布がイリの身体を優しく包む。

「少しお休みなされ」